

ふるさと歴史散歩 243

～松前史談会レポート～

矢取川水論の地めぐり II

矢取川にはもう一つ大きな事件の舞台となった「魔住ヶ窪」という場所がある。矢取川水論を遡ること430年前、少し上流で起きた大森彦七盛長と魔女の伝説である。

大森彦七は、南北朝の争いで河野氏の家臣として足利尊氏側に付き、延元元(1336)年の湊川の戦いで敵将楠木正成を自害に追い込んだ武勲で知られる。その功績によって松前などに所領を与えられた。

彦七は当時流行していた猿楽(能の原型となった中世の芸能)を好み、屋敷でたびたび開宴していた。

暦応5(1342)年、松前の金蓮寺春祭りの猿楽に招待され、矢取川にさしかかると、美女が川を渡ろうとして難渋していた。女に道案内を請われ、彦七は背負ってやることにした。しばらくして川を渡っていると、背中が急に重くなり、何が起こったのかと川面に映る顔を見ると、女の顔は鬼女に変わっていたのである。鬼女は彦七の髪を掴み空へ舞い上がろうとした。しかし、彦七は鬼女の腕を掴んで引き戻した。そこへ駆けつけた部下を見て鬼女は彦七を放し、宙を舞って消えていった。『太平記』巻二十三に、この魔女は楠木正成の怨霊によ

る変化で、彦七が入手した正成の遺刀菊水の宝剣を奪い返すため、その後も彦七を悩ました話が載っている。

魔住ヶ窪の名は鬼女が彦七を待ち受けていた場所であることから付けられた。そして地藏堂はこの鬼女の供養のために建立されたものであると伝わっている。次号に続く(麻生英毅記)

【参考文献】景浦直孝『伊豫史論考』伊豫史談会1961、『砥部町誌』1978、『松前町誌』1979



① 魔住ヶ窪 当時の矢取川に橋はなく歩いて渡っていた。左手は地藏堂。

『太平記』に取り上げられた彦七と魔女の伝説は、後に謡曲や浄瑠璃、歌舞伎に取り上げられるほど評判になった



② 大森彦七供養塔 正徳2(1712)年、砥部宮内の庄屋田中権内が彦七の功績を称えて建立した。しかし、いつの時代か供養塔が三つに折られ倒されていた。江戸期に入り後醍醐天皇の南朝正統説が唱えられると、足利尊氏や大森彦七は天皇に弓を引いた逆賊であるとした皇国史観が終戦まで続いたことによるものかも知れない。現在は写真のように修復されて祭られている

8月の歴史散歩は実施しません。

松前史談会(麻生) ☎ 090-4472-8136



【開館時間】 9時～22時 【休館日】 12月28日～1月4日
◆東公民館 神崎210 ☎ 984-1159 FAX 984-1457
◆西公民館 北黒田966-2 ☎ 984-5313 FAX 984-5313
◆北公民館 昌農内456-1 ☎ 984-7529 FAX 984-9398

東公民館

毎月順番に活動内容をお届け!

図書室で自分時間を満喫



①読書スペースも充実
②新刊図書の数々

この暑い季節、公民館で涼みながら読書をして過ごしませんか。東公民館では、たくさんの書籍を取りそろえています。

6月に新しい本が13冊加わり、来館者に好評を得ています。人気アニメの漫画、話題の料理本、恋愛小説や推理小説などジャンルはさまざま。いくつか読もうと思っていた、あの1冊に出会えるかもしれません。

じっくり読書が楽しめるスペースもあり、調べものや勉強にもおすすめです。図書室の開館時間は、平日9時～17時15分です。貸し出しも行っていますので、お気軽にお立ち寄りください。

ふるさと ライブラリー

◆開館時間 9時30分～19時
◆問い合わせ ☎ 985-4140 FAX 985-1386
<https://www.i-masaki.jp/library/>
◆8月の休館 29日(金)

おはなし会
9日(土) 11時～
「おはなしコンサート」
出演・にゃんころず
文化センター
1階リハースル室

◆新着本 紹介

毎週新しい本を入荷し、随時、新着本コーナーに展示しています。貸し出し状況、予約状況はお問い合わせください。

▶ ジェイムズ
パースヴァル・
エヴェレット・
著 河出書房
新社



『ハックルベリー・フィンの冒険』で脇役だったジェイムズを主人公に、黒人奴隷の目から見た物語を大胆に再解釈。逃亡奴隷ジェイムズの過酷な旅路の果てに待つものとは…。

▶ クロエとオオエ
有川ひろ・著
講談社



宝石商の御曹司・大江と、彫金職人の娘・黒江。最初のデートで贈ったリングを突き返されてから、二人の関係は「メシ友」と「恋人」の間で謎のまま。有川ひろが贈る、王道のお仕事ラブコメ。

▶ しふく弁当き
きみみ堂
冬森灯・著
双葉社



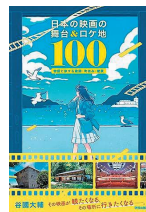
依頼主の話を耳を傾け、思いをお弁当に仕立てて届ける特別メニュー「しふく弁当」。食べる人の背中をそっと押す、小さな包みに込められた、あたたかな絆の物語。

▶ 蜘蛛 なぜ神で賢者で女なのか
野村育世・著
講談社



蜘蛛が網を作ると、「恋しい人がやってくる」と喜んだ平安貴族。ナスカ台地に描いたペルーの古代人。世界の神話に数多く登場する、蜘蛛と人の不思議な関係を、日本中世史研究家が考察する。

▶ 日本の映画の舞台&ロケ地100
谷國大輔・著
学芸出版社



大ヒット映画の舞台・ロケ地を、写真とともに掲載した日本のロケ地ガイドブックの決定版。アニメ、恋愛、時代劇、ホラーなど、ジャンルごとに紹介。なぜそこがロケ地になったのか等のテレビでも掲載。

▶ やくそく ぼくらはぜったい戦争しない
那須正幹・著
ポプラ社



ばあちゃんはぼくを「にいちゃん」と呼ぶ。ばあちゃんの兄さんは原爆症で死んだのに…。生涯をかけて平和を訴え続けた作家・那須正幹の遺作。